

# 春燈



November 2009

11

主宰の句

安立公彦

地に落ちし空蟬枝に還しおく

秋立つや遠山みづの青さもて

秋風や翁も踏みし磴の数  
(立石寺)

夜なべの灯ひとり点せる机辺かな

コスモスの影より淡きもの知らず



# 燈下集



○ 小島 禾汀

ララ物資はるか感謝の終戦日  
地震あとも表情変へぬ盆の富士  
遠花火闇にひろがる二尺玉  
露草やきのふのいろに変わりはなし(悼)  
燕去ぬ街に投票広報車

○ 橋 爪 隆

梅雨はげし鳩寿ひとりの俳諧苦  
新聞に曜日たしかむ菊日和  
水甕の底の暗さや目高跳ね  
卒寿またひとりもよしや苺めし  
妻亡しの錦秋束の間なりしかな

○ 橘 正義

夕爾忌や夕爾追慕の敦の句  
うなづいてゐるだけで済む夜の秋  
秋暑し苦言さらりと受け流す  
閻魔大王台風圏に胡坐せる  
鬮雲外野・内野手守りぬき

俄雨落雷突風要注意  
百日紅うとましくまたなつかしく  
夏負をせぬぞと鱒を焦がしけり  
震度4なりし秋暑を追打ちす  
新涼や女性車掌の山手線

○ 小林のり人

合歓咲くや沼垂木簡出土の地  
向日葵の影の濃淡午後に入る  
オートバイ吹かせ発進早星  
山百合や地震にくづれし墓の辺に  
積みあげし薪の切口秋立ちぬ

○ 三上程子

かたちよき桃をいびつに描きにけり  
新涼や惜しげなく首のばす亀  
秋暑しゆらす鶏冠の裏表  
広め屋の笑みを絶やさぬ厄日かな  
子の知恵に寄り添ひ灯火親しめり

○ 浅野洋子

八月の病者に作る風の道  
秋冷や紅肌秘むる染茶碗  
子とありし日の一酌の花野かな  
露けしや濡れて三界万霊碑  
大壺の大口冥き夜長かな

○ 井上春子

夏暁や樹々それぞれの息づかひ  
秋めくや草の秀いつもどれか揺れ  
家中を点し八月十五日  
空蟬にあかときの風流れけり  
四五本の白樺映す水の秋

○ 中野あぐり

「断腸亭日乗」を読む敗戦日  
灯を消せば忽と入りくる盆の月  
天道虫ころりと上総晴れにけり  
戸袋に戸の収まらず秋暑し  
舟の名のみな佳き名なり秋澄めり

○ 小石珠子

魚屋の路地いちめん水打てり  
夏シャツのいま頼もしき反抗期  
新涼や松籟白き鳩放つ  
遺されし花瓶に充たす秋の水  
祝ぎ歌の灯のあかあかと竹の春

○ 大嶋 洋子

面影の彼の日の母や敗戦忌  
人遠し海を見てゐる敗戦忌  
青春の五浦の海や小鳥来る  
ふるさとや秋の袴の草木染  
木犀の一枝手折るや誕生日

○ 太田 具隆

終戦日暮れてみ空の高臺  
八月の竹のよしあし垣間見る  
散るに凝る酔芙蓉とは粋芙蓉  
秋めくや子連れ野猿と出会ふ道  
台風が水洩れ池を満たし去る

○ 益田 寿美子

胸張つて処暑の古家に生活せり  
高層ビル街見上げて抜くる震災忌  
竹の春風のせせらぎまとひけり  
小鳥来る昔丸子の渡し跡

三日月濠五十間櫓水澄めり

○ 阿部 泰子

駅前の広場うづむる夏祭  
ブランコの雲まで届く夏の昼  
盆踊やぐら太鼓の芝生かな  
高原の緑の中の水引草  
子はゴルフ独り留守番夏の雲

○ 西谷 良樹

新涼や指でそば盛る蕎麦処  
走馬灯同じ馬来てつまづきぬ  
イーゼルの脚水に立つ秋の蟬  
みちのくの風の高さや懸煙草  
金色堂くるみし山や秋の雨

○ 長 浜 徳 三

叩いても分からぬ西瓜たたきけり  
生身魂語るはいつも勝いくさ  
紙一重の「運隊」うんたいに生き敗戦日  
柿二つ供へて拝す子規の墓  
居眠りを見て見ぬ振りや夜学の師

○ 綱 徳 女

行間に想ひを込めし夏見舞  
ヒロシマ忌語部すでに年深し  
夏霧や拭ひきれざる不信心  
人気なき午後の漁港や赤蜻蛉  
病む兄の車椅子押し登高す

○ 末 吉 治 子

新豆腐吉野杉箸香りけり  
保命酒の猪口は大ぶり新豆腐  
烏兔勿々空しかりしや終戦日  
亡き母の箆筒は開かず秋湿り  
秋湿り板戸なだめて閉めにけり

○ 滝 沢 幸 助

秋の山高ければ谷深からむ  
総選挙終りし国の秋俄か  
福島医大附属病院秋夕日  
秋の男転んでは只起きしのみ  
夜の秋世の秋しみて我の秋

○ 細 江 久 美 子

大正生れ残り少なの浴衣かな  
一村を一刻賑はし夏芝居  
風鈴の時折唄を忘れをり  
晩涼や亡夫の手沢の煙草盆  
青簾独りの暮しに風入るる

○ 中 村 嵐 楓 子

不登校児に凌霄のさかりかな  
麻のものを着てすこやかに老いにけり  
狛犬の阿畔を分けて黒揚羽  
消防車机上にまろぶ晩夏かな  
踊る手の中には化ける手もありし

○ 鷹 崎 由 未 子

秋近し弥勒は半伽とかれけり  
身のうちの昔が疾く盆用意  
笑ひ茸心はるれば食したき  
かまつかの飛火しさうな炎色かな  
身の程を知りし高きに登りけり

# 当月集を読む

9月号

林 紀夫

夫の旅切り火で送る単衣かな

清水 美子

時代劇の一シーンを思い出した。銭形平次が、いざ出陣の時に、恋女房のお静に打たせる切り火である。仕事で出掛けるご主人の、道中の無事・仕事の成就を願う妻の心遣いは、いつの世にもありがたく心に響く。季語「単衣」がいい。この作者、切字の使い方が非常に旨く、さらに季語の説明を一切していない。これからが楽しみである。

荒畑に母の影置く帰省かな

神田 恵琳

古里に帰ると、畑で働いている母に遠くから気が付いたものだ。いまでも、古里に近づくと、畑で働いていた母の姿を思い出す。「母の影置く」とは、うまく表現したものと感心する。

父祖の地の一汁二菜麦の秋

都丸美陽子

掲句の次の〈あはあはと栗の花あり母の里〉と対をなす句として鑑賞したい。父祖の地は、周囲一面麦畑で、食事も贅沢ではないが、自分たちで育てた地の物の一汁二菜で

あった。「麦の秋」が効いている。一方、母の里は、里山近くの栗林の近くで、今頃は万朶の花を咲かせていることだろう。二句とも郷愁を誘う句である。

夏の雲つかまむと伸ぶ園児の手

小山 繁子

作者は、幼児教育の責任者として多忙を極めていると聞く。掲句は、そのような現場での一齣であろう。「夏の雲」を掴もうと手を「伸ばす」のではなく、手が「伸びる」のである。これは、常日頃から園児の行動をつぶさに観察していなければ出てこない表現で、「夏の雲」が効いている。〈母の色なりむらさきの杜若〉〈夏椿地へ還るいろ見とどけむ〉この二句、言葉の使い方が非常に佳い。所謂「手垢の付いた言葉」では無く、自分の言葉で作句しており新鮮さを感じる。ますますの活躍を期待する。

いたはりに慣れぬ戸惑ひ梅雨ふかし

金子 輝

掲句の一句前に〈通院の杖いとほしむ額の花〉がある。通院するようになって、回りからの「いたはり」を身にしみて感じるようになった。今までも、回りからの労りはあつたが、ただ感じなかっただけである。逆境になって初めて他人の情を知る。感情の動きがよく現れている。

(以下略)

# 当月集

安立 公彦選



○ 小 俣 剛 哉

羽後の夜の竿灯くぐる一人旅

生身魂かつて棚田の山頭

古里は町まで過疎に野分かな

落花生下総の土こぼしけり

兄弟に虫籠一つ山手線

○ 前 原 早 智 子

円空の彫りし仏や秋に入る

眷属の十二神将涼新た

新涼や羽根を拡ぐる白孔雀

桐一葉一葉に昼の深みけり

夕映えの真緒の芒ありにけり

○ 今 井 弘 雄

かなかなや足元暮るる中尊寺

露草のはなだ色なる夜明けかな

風立ちて湖のさざ波鳥兜

新涼の目薬一滴朝の風

雁渡し母を迎へに車椅子

○ 竹 内 慶 子

綿シャツの肌になじみて今朝の秋

三本杉すり抜くる風秋裕

大瘤を抱くすだ稚秋の風

新涼の投網きれいに畳みけり

鍋底を磨き上げたる厄日かな

○ 北 岸 邸 子

ここからは少し遠しや大文字

忘れもの取りに戻りぬ秋あかね

何時からのまどろみ癖や秋団扇

風渡る八百八橋涼新た

虫の音や襦袢立ち止る潜り門

# 春燈の句

安立 公彦選

まなうらの還らぬ機影雲の峰

埼玉 鈴木 撫足

親不孝の作りし茄子の馬なりし

水の惑星に住む幸せの西瓜かな

置いてきぼりされて子守やつくつくし

烏啼く夏は毀れしまま終り

神奈川 石田 康明

癩ひてなほ聴こゆるものに秋の風

秋草や抱一筆のごとなびき

手沢濃きくづし字辞典秋ともし

河鹿鳴く峽に住み居て世に疎き

秋没日ボプラの天辺金に染む

地藏盆草に埋もれし牛馬の碑

蚯蚓鳴くいつしか母の年越ゆる

父母と独りを灯す盆提灯

こまやかに母子の語らひ白木槿

東京 篠原 幸子

有縁とふ声さはやかに青年僧

面白う法話終りぬ施餓鬼寺

白日傘木漏れ日余す独りの歩

赤とんぼ入日まみれに生くる証し

山の湯やいろなき風を私す

燕去ぬ返信の文ポストイン

秋の灯や廊下の先の母の部屋

今朝の秋鏡に笑みを返しけり

鶏頭に朝の始まる駅舎かな

蝸にひとしき間合ありにけり

手火花を終へし児の髪火花の香

朝涼や剃髪すみし若き僧

水打つや盛り塩たかき路地の店

草ひばり鳴きつぐ「鬼平犯科帳」

神奈川 小山 繁子

千葉 西岡 啓子

東京 宮沢 治子



# 余言

安立公彦

八月の病者に作る風の道

浅野 洋子

「八月の」がよく効いている。試みに、「七月の」「十月の」と置き替えてみると、そのことが納得出来る。「病者」は作者の夫君。長いこと病床にある。

この句で注目すべきは「作る」だ。この「風の道」は扇風機でもクーラーでもない。作者が送る団扇の風である。使い古された「風の道」が新鮮な感覚で詠まれている。それはひとえに、作者の病者に対する愛情から生まれた表現と、技法のみごとなさにある。

子の知恵に寄り添ひ灯火親しめり

三上 程子

幼児の発育の過程を見ていると、時として神秘的な力を感じることもある。それは遺伝子情報などという細胞論では整理出来ないまさに神の領域のテーマである。そうしてこういう思いは、自分が父親だった頃には考えようとしなかった。わが子に幼児が出来て、初めて踏み込み得た世界と言つてよい。

この句の〈子の知恵に〉を見ていると、自ずとそういう思いが湧く。この句はそういう思いを秘めつつ、幼児を交えた団扇のひとつの句である。

折しも灯火親しむの候。一句はあたかも秋の灯のいろいろのように明るく和やかだ。

「断腸亭日乗」を読む敗戦日

中野あぐり

「断腸亭日乗」は今さら書くまでもなく、大正六年九月十六日から、昭和三十四年四月二十九日まで、実に四十二年間にわたる永井荷風の日記である。その日記は、「四月二十九日。祭日。陰。」で終っている。翌朝通いの老婆が背広のまま、吐血して絶息している荷風を見つけた。

荷風終焉の地は千葉県市川市。晩年荷風は体調を崩し、日記にも、「正午大黒屋」という記述が続く。大黒屋は京成電鉄八幡駅前の食堂。私もはるか以前、この食堂に、荷風が食したという「かつ丼」を食べに行ったことがある。

この句は、書名と季語を「を読む」で結んでいるだけの句である。しかし一句の内容は深い。一つは近代日記文学

の最高峰と称される「断腸亭日乗」、一つは「敗戦日」。双方ともになまじつかな感想は要らない。そしてその二つを「を読む」がよく助けている。巧みな表現だ。

ちなみに荷風は戦後市川に移り住んでから、その寓居を四回替えている。その何れも同じ市川に住む作者とは近い距離にある。作者の荷風への愛着も深かるう。

添削の痕もあるらむ落し文 呂 秀文

林間の小径を歩いてみると、よく落し文に遇う。「落し文」には「落書（らくしよ）」の解もある。季語として用いる場合は、オトシブミ科の甲虫が、夏期、広葉樹の葉を丸めた中に産卵して地上に落したものを指す。これらのことは歳時記に詳しい。

それを前提として、作者はその「落し文」に「添削の痕もあるらむ」と付ける。言われてみれば成程と思う。この取り合わせは絶妙だ。そしてこの句によって、前述した「落書」の解が生きてくる。

鍋底を磨き上げたる厄日かな 竹内 慶子

「厄日」は「二百十日（二十日）」。今年の厄日は九月一日だった。作者は今一心に鍋底を磨いている。ふと今日は二百十日だと思ふ。磨き上げた鍋底には、厄日を無事送ることが出来たという安堵の思いが揺蕩う。

これは動作としては日常の所作である。そして日常の所作の中に何気なく湧き興るうたごころこそ、俳句の基因である。虚子はこれを「存問」と称した。

鍋底にはまた景気の落ち込みを示す意味もある。「磨き上げたる」にその思いも幾らか籠められていよう。ことさら難しい言葉を使うでもなく、日常存問の思いを表現して、しつかりとした俳句に仕立てている。

今生に読みたき本の嵩や秋 山 博介

いかにも研究熱心な作者らしい句である。この句を見てみると、果して「読みたき本」の幾つを読了したかという忸怩たる思いがする。しかし読書は年齢に関係なく大切な心の糧だ。「今生」という重い言葉を用いているが、句意は素直に受け入れられる。それは結句に「秋」を据えた作者の表現の良さにある。

烏啼く夏は毀れしまま終り 石田 康明

この中七下五をどう解釈するか。一つは作者の健康状態である。しかし一句を誦していると、もつと深い思いが感じられる。強いて言えば、へ水は水洲は洲の夏の果つるかな 万太郎の思いに近い。

毀れるものは形あるもの。しかしこの句の「毀れ」は作者の心象が捉えた風姿である。